松中の絆《道徳資料》『本気の生活ノート』自問自闘の日々を綴る　松茂中学校3年 2024年5月9日(木) 第5号

自問自闘の日々を生きる「本気の生活ノート」
～自己をみつめ 人間性を磨き続ける生活ノートの記録に学ぶ～

中学3年の1年間は、皆さんの人間形成にとって重要な1年になっていきます。中学1年、2年と、今まで経験してきた体育祭や文化祭、合唱コンクール、その一つ一つに皆さんは全力で取り組んできました。その営みが、中学3年では、驚く程の輝きを放っていく取り組みになっていきます。

それは、中学校最終学年で直面していく試練と舞台が、皆さんを大きく成長させていくことになるからです。そんな日々の営みに思いを馳せながら、「自問自闘」を繰り返す生活ノートをしっかりと綴っていきましょう。

自己の内面をみつめ、その思いを誠実に綴り続けた生徒の生活ノートを紹介します。その生徒は、毎日1頁の生活ノートを書くという目標に向かって、自分の本当の思いを記していきました。生活ノートが、生徒自身を大きく成長させていくことを実感する「3つの生活ノート」を紹介します。

①　生活ノートは私の宝物

まず、生活ノートの意味について、その思いを誠実に綴ってきた生活ノートを紹介します。

自分をみつめ、生活ノートを書き続けていくことがどれほど自分自身を鍛え、その存在をキラキラと輝かせていくか。生活ノートを継続させていくことのすばらしさを訴えた生活ノートです。頑張り続けた人間にしか見えない世界が綴られています。

【もうすぐ生活ノートも終わる。４月の初めの頃、先生は「１年間書き続けたら、かるく（大学ノート）４冊か５冊はいくよ」って言った。そのとき私はそんなにできるはずがないと思っていた。１日１頁もの量をどうやって埋めようかと困った日もあった。

自分が焦ったり、疲れたりしているときは、なかなか自分を見つめられない。中学３年という時期は、私にとって初めての進路選択の年でもあったから、やっぱり生活の中心は勉強だったと思う。だからくたくたに疲れた日は、このノートを書くのがつらかったし、実際サボった日もあった。だけど、夜遅くに一人落ち着き払って自分を見つめる作業が楽しかったのも事実だ。苦しいときもプラスの方向を見い出せるように、このノートにいろんなことを書いた。それによって励まされたこともあるし、そうやって頑張ることをやめないように努力した自分も好きだった。

内容はまあくだらないのが多かったけど、その中でもお気に入りの文章がある。でもその文章っていうのは、くだらない文章を毎日毎日書き続けることがなかったら、決して生まれてこなかったと思う。生活の中で単調な作業を繰り返すのは結構しんどいけれど、やっぱりそれは大きな力を生むと思った。

その大きな力とは、このノートに良い文章が書けるとか書けないとかいうのではなく、「自分の生活を、自分の一日一日を、大切に生きていこう、確実に踏みしめていこう」ってだんだん思えるようになることである。そんなにすぐに変化は見えてこないけど、１年続けてきて、本当にこのノートを続けてきて良かったと思える。まさに「継続は力なり」だ。

このノートには、勉強の悩みとか、クラスの問題とか、楽しかったこと、苦しかったこと、いろんなことへの自分なりの答え（問い）を書いてきたつもりだ。同和問題学習のこともまだまだ勉強しなくちゃいけない部分があるけど、クラスで、全体学習で、自分の意見を一生懸命発表したこと、またこのノートにその思いをぶつけたことも、最初何も知らなかった私にとっては、本当に前進だった。

このノートを書いてきて良かったと思うのは、たくさんのことを学べたということだ。それは続けることの大切さと難しさ、またひたむきに生きていくことの強さ、そして、常に自分に問い続けていけることのすばらしさを実感したということだ。本当はこのノートを高校になっても続けたいって思う気持ちがどこかにあるんだけど、もうこのような情熱的な文章は書けないような気がする。このノートは本当に私の宝物だ。今までやってきたすべてのことが無にならないように、これからの生活を今以上に希望と自信を持って全力で頑張っていきたい。】

②　生活ノートの返事は私の宝物

卒業式前日のしんみりした生活ノートです。皆さんは、松茂中学校の生徒として、最後の日を迎える卒業式前夜どんな生活ノートを書くのでしょうか。中学3年生をひたむきに頑張った自分に思いを馳せながら、この生活ノートを読んでみてください。

【とうとう明日が卒業式か。今まで「別に卒業したって何もかわらん」って思っていたけど、今日学校で先生の話を聞いたり、みんなと写真を撮ったりしていると、一気に「卒業するのか」っていう自覚が出てきた。「本当にこんな私が卒業して大丈夫なんだろうか」ってすごく不安になって、高校生になるというのに恐れている自分が見えてきた。

本当に３年間、息つく間もなく終わってしまったように思う。だけど３年になってこのノートを書き出すことによって、この１年をただ「短い」の一言で片付けることはできなくなった。すべてが昨日あったことのように、４月からの毎日を鮮明に思い出すことができる。

私は特に忘れっぽいからかもしれないけど、この３年間を振り返ってみると、ほとんど毎日毎日が楽しくて仕方なかった気がする。いつも無鉄砲で、その時その時になってやっとあわてだすようなおっちょこちょいな性格だけど、そうやっていちいち走り回っている自分が楽しくておかしくて、そんな自分が大好きだった。それに自分を表現できたこともうれしかった。決して全体学習での発表も上手じゃなくて、自分の思っていることの100％を出し切れる発言はできなかったけど、自分を表現することの喜びは充分満喫することができた。

私はまだまだ子どもっぽいし、決して高校生って感じではない。勉強も今まで以上に難しくなるはずだし、もしかしたら、今以上にゆとりもなくなるかもしれない。でもそれは嫌だ。もちろん勉強もしたいけど、友達と遊んだりもしたいし、他のこともやってみたい。そんな目的があって高校に行く。こんな自分を欲張りって思うかもしれないけど、すべてを欲しがる欲望っていうか、図々しさを持って生きていきたいと思う。何もせず固まった３年間を過ごすんじゃなく、「今、自分は生きているんだ」っていう喜びっていうか、自分に対しての誇りを持って生きていきたい。

私も15年間生きてきて、先生ほど強烈な先生に出会ったことはありません。きっと生涯先生のことを忘れることはないです。先生も私のことを忘れないって言ってくれたけど、もしそれがお世辞だったとしても、私はすごくうれしいです。人からこうやって認められるのはやっぱりうれしいです。先生の書いてくれた生活ノートの返事は私の宝物です。前途多難な私の人生かもしれないけど、今年やってきた積み重ねをこれからの土台として、誇りうる自分の人生を築いていきたい。不安なことも多いし、今まさに峠の瞬間だと思う。だけどゆっくりと自分を見つめながら、しっかりと歩いていきたい。】

③　自分をじっくり見つめる作業、卒業後の3月31日に綴った生活ノート

学校生活の様々な場面で語られる先生の言葉をひたむきに聞き、自問自闘することによって、皆さんの人間性は、乾いた砂が水を吸い込むように磨かれていきます。そして、「信頼と尊敬の絆」で結ばれた仲間と、「本当の思いを語り合う人権学習」によって、自分自身を大きく成長させていったよろこびが綴られた生活ノートです。

【これが最後の生活ノートとなる。先生との出会いについて綴りたい。まず先生は、私に毎日「生活ノート」を書くように言った。しかも１日１頁という結構な量だ。１・２年の頃も生活ノートは書いていたが、毎日１頁というのは私にはちょっとつらかったかもしれない。

しかし私は、この生活ノートで今までの自分の考え方を大きく変えることができた。私は中２の頃、クラスのまとまりのない雰囲気が嫌で嫌で仕方がなかった。「自分はきちんとできているのに、周りが全然やってくれない」っていう被害妄想の意識で、いつもため息ばかりついていた。

でも３年になって、夜寝る前にこのノートを書くようになってからは変わった。ノート１頁を埋めるんだから、やっぱり深く自分のことを考えなくてはならない。私は今まで何でも物事を決めつける癖があったのかもしれないが、自分をじっくり見つめる作業をすることで、今まで見えなかった自分の悪い所や友達の良さをどんどん発見することができた。

また先生はしょっちゅう「昨日の自分より今日の自分が好き」っていう話をしてくれた。先生の話を聞いていると、私もそう思えるように努力してみようと思った。私は本当に自分に誇りと自信が持てるように、本当に自分のことが好きって言えるように、毎日を頑張ってみようとすることで、本当に自分も変わったし、周りに対する考え方も変わった。周りを否定する前に、今自分にできることをやろうって思うようになった。そうすると受験勉強にも力が入ったし、クラスの問題にも積極的にいろんなことを考えたし、同和問題について実際に親と話ができるようになってきた。そして、そんな自分をまた生活ノートに綴るのが本当に楽しくもあった。

私は物事を前向きに捉えることによって、多くのことがうまくいったと思う。うまくいかなかったとしても、そこで失望したりするんじゃなく、もっと別の前向きな考えをするようになった。それって本当に単純なことだけど、本当に人間として強くなっていくことだと思う。そんなシンプルな事実を教えてくれたのがＡ先生だ。

また語ることのすばらしさについて教えてくれたのもＡ先生だった。私は今まで同和問題のことについて知ったかぶりをしていた。「自分は差別していないから関係ない」って思っていた。それに「自分と部落の人と立場が違うのに気持ちが分かり合えるはずがない」と思っていた。

だからこの問題に対して、どれだけ分かろうとしても、それ以上は分かることはないという意識が、ずっと私の中にあった。だけど３年になって、本気で語るＡ先生とか、「この問題に生命をかける」と言い切ったM君や、Ｔ君やＯさんとか、いろんな人の意見を聞いているうちに、私も今まで思ってきた自分の思いをみんなに言うようになった。そこから私自身のホントの同和問題学習が始まったように思う。

自分の本音を言うことによって、相手の本音を知るようになる。そんな当たり前のことが今までの私にはなかった。それって当たり前のことでも、やっぱり難しいことだと思う。

そんなふうにみんなと意見を交わし合う中で、私も自分にできることをやらなければって思うようになって、親とこの問題について話すようになった。すると今まで見えなかった親の差別意識や、自分の考えの甘さなどがたくさん見えてきた。つい感情的になったこともあったが、一生懸命自分の思いを伝えていくことが分かり合えるための一番大切なことだと気づいたりもした。

クラスでも何度も何度も話し合って、時には口論になったこともあったが、あんなに深く物事を考えたクラスは、そうないと思った。私も先生やいろんな友達によって、今まで自分の中にはなかった新しいことをたくさん吸収することができた。そして、吸収したことを深く自分の中で考えることが大切であることにも気づけた。

人と人とのつながりの中で、いろんなことを学ぶこと、一緒によくなっていけるって本当にすばらしいことだと思う。

そこに自分を語ることのすばらしさがあるんだと思う。

まあ、先生のことを書き始めると、いろいろあり過ぎてきりがないんだけど、本当にいろんなことを気づかせてくれた。中学３年という時期に学んだことをこれからの人生の礎として、しっかりと頑張っていきたいと思う。】

※今年度、22歳になる松茂中学校の2017年度卒業生が、卒業式後の学活でクラスの仲間や家族へ感謝の思いを語った写真です。